勇者よ、宿屋の店主になってしまうとは情けない

倉田シンジ
挿絵／へるるん

あとみっく文庫

立ち読み版

ウィル

岩から伝説の剣を抜いたことで、勇者として認定された少年。

リーゼロッテ

神秘的な魔法を使いこなす、ミルキア神聖王国のお姫様。

マージ

セクシーなダンスで人々を魅了する、謎の踊り子。

アニス

シルベリア王国のお姫様ながら、なぜか宿屋で働いていた少女。

レオノラ

ウィルと同じ村の出身で姉のような存在の、頼りになる女戦士。

CHARACTERS

顔を近づけて勃起を観察し、まるで本人に確認を取るように呟かれる。まだ亀頭部分に包皮を三割ほど残してはいるが、ビキビキと音がしそうなほどに張り詰めていた。
（こ、これは……じっと見られると恥ずかしいぞ。けど、ものすごく興奮する……）
端整な顔を恥ずかしげに上気させた美少女がうっとりと、それでいて好奇の視線で股間を眺め回している。異性にこんな状態の部位を見せるのは初めてで、もちろん恥ずかしさはある。でもそれ以上に興奮していて、ペニスはなにもせずとも脈動するほど。
むしろもっと見てほしいような気持ちになって、ますます腰を疼かせてしまう。
（ううっ！　さ、触ってる？　リーゼロッテの手が……）
つんつん、さわさわ……。
肉茎の反応を探るような、控えめな刺激が下半身を包んでいる。
上を向いた勃起を倒すように指先で押して、放した瞬間にぴんっと跳ねる様をしげしげと眺め。血管の浮き上がりに沿って根元から先端までをそっと撫でてみたり。
ぞぞぞっ……と背中を走った感覚にウィルは思わず「うあっ！」と漏らし、その表情に気づいた手が止まった。
「ごっ、ごめんなさい！　あのっ、わたくし、初めて見たものだから……」
なにか不手際があったと思ったのだろう。
だが、寝そべるウィルに心配そうな上目遣いをする表情がまた愛らしい。視線に心臓を

射貫かれてドキドキしながら、こちらも慌てて弁解する。
「いやっ！　ち、違うんだよ。なんというか、気持ちよすぎて反応しちゃったというか。俺もこんなことされるの初めてだから、変に緊張しちゃって……」
「そうなのですか？　ウィル様は、決まった相手の方はいらっしゃらないのですね……」
それが望んだものかそうでないかはともかく、「決まった相手」なら目の前にいる。ただ、この期に及んでそれはもうどうでもいい。
「だから、もっと触っても大丈夫だよ……。いや……もっとしてほしい、かも」
「まあ、ウィル様ったら……！　うれしいです……」
求められる喜びに瞳をうるうるとさせながら、リーゼロッテはもう一度手を触れさせ、伸び上がったペニスの頭を撫でるように、包皮から出た亀頭部分を指先でなでなで……。
とぷっと先走りが漏れ出た瞬間。びくくっ！　と震えてひときわ体積を増し、ペニスがひとりでに包皮を下ろしてしまう。
「でっ、でも！　ううっ、あ、あんまり、触ると……で、出ちゃうから……」
他人から触られるだけでこんなにも過敏な反応を返してしまうとは。
情けないが、このままではあっさり出てしまう。なんだかそれはもったいない。
「それは困りますわ……。だって、殿方はそう何度も精を出せないと聞いています。わたくし、ウィル様のお情けはここにいただきたいのです……」

と言いながら、下腹に手を当て身を起こすお姫様。相変わらずストレートな物言いだ。
（正直に言えば、一度や二度出したくらいじゃ収まりそうにないんだけど……）
ウィルが見下ろす自分のイチモツは、これでもかとばかり張り詰めて欲望を吐き出したがっている。ここまで興奮するものかと、自分でも信じられないくらいだ。
うっとりとした表情と言うべきか、あるいは恥じらいの中に発情を忍ばせていると言うべきか。彼女はほんわりと上気した頬、揺れる視線で膝立ちになった。
彼女がワンピースのスカートをまくり上げたせいで、白い上品な下着が見えている。その真下には天を向くペニスがそびえていた。
（なんだか濡れてるみたいな……リーゼロッテも興奮してるのか？）
「あの中を見たい」というウィルの心の声を聞いたように、姫様の指が下着の端へ。じっとりとした湿り気を帯びた股布が横にずらされていく。
「あ、あんまり見られても……恥ずかしいですわ……」
「う……。でも、見たい……」
そのわがままに気分を害するでもなく、むしろ自分を求める言葉に小さく肩を震わせて、少女の指先が股布を引き寄せる。
（ああ……女の子のあそこって、綺麗だ……）
髪質と同じに、ほわほわとした陰毛が薄く恥丘を飾っている。その中に埋もれた恥裂も、

仰向けのウィルからはかろうじて見ることができた。
「わたくし、はしたないです……。でも、ウィル様に見てもらうのが嬉しくもあって……」
恥ずかしさに声を震わせ独り言のように呟きながら、リーゼロッテは臆することなく指を動かす。思いきりのよさはこんな時にも発揮されるものらしい。
閉じられた花弁を開く指に合わせて、にちゃりと。確かに密やかな音を聞いて、ウィルの興奮は最高潮に達した。
「きゃんっ！　ウィルさまぁ……んあんっ！　はぁ、あぁ……！」
腰をほんの少し浮かせただけだ。それで、亀頭がにちゃりと秘裂を押し分けた。左右に押し開かれた割れ目の中は、初めて感じるサーモンピンクの感触をぬめらせていた。
（うあぁ……ネトネトしたものが……ぴたっと貼りついてくるみたいな……ううっ！）
早く入りたいとねだるように、亀頭で入り口を探るように。にちゅにちゅと音を立てながらペニス先端が秘裂を掻き分けて擦りまくる。
「す、少しだけ、あうんっ！　こ、このままで……」
敏感になった下腹の感覚に耐えられないのか、リーゼロッテがきゅっと身体をすくめて動きを止めてしまう。必死に息を整えている。
（ううっ……これじゃ生殺しみたいだ……！）
ウィルだって、初めての挿入に向けてペニスが疼いてしょうがない。

目を上げると、少女のワンピースが乱れ、肩紐がずり落ちて半脱ぎになっていた。露出した肩には下着の肩紐だけ。元が上品な佇まいなだけに、妙にいやらしい。
（そうだ、リーゼロッテの裸を見てみたい……！）
ウィルは少女を支えてやりながら、指を引っかけ、胸の下着をずり下げる。
「あんっ！　な、なんだか目つきがいやらしいです……」
「ご、ごめん……」
謝りながらも、はだけられた胸にその目が向かっている。
真っ白な乳房に、ふわりと浮かぶように淡く赤い乳首。乳房全体は適度な膨らみを誇る絶妙な形で、お椀型に盛り上がった柔肉を指で支えると、ぷにりと沈む感覚が。
「綺麗だなあ……。それに、こんなに柔らかくて……すべすべして」
「うう……そ、そんなことおっしゃらないで」
つい口に出してしまった感想に頬を赤らめ、リーゼロッテ姫は俯いてしまった。
その胸に手を当てる。手のひらを吸いつかせて持ち上げるようにすると、確かな重量感が心地よい。少し力を加えると、ぷにぷにと形の変わる感触が胸を疼かせる。
早く腰を下ろしてほしいと催促するように、乳首を指に挟んでみた。
途端、少女の身体がふるるっとわなないた。
「ひゃんっ！　んっ、そこは……ぁ！」

（あれ？　なんだか……柔らかかったのにクリクリした感触が……）

乳首も充血して勃起するのだということを実感しながら、挟んだ指の間できゅっと転がしてみる。わずかにひしゃげる柔らかさの中に、確かな感触。

「ふああっ！　だ、めぇ……、なんだか、胸の中が……むずむずしますぅ……んんっ！」

軽く潰れた感触があった途端、「ひゃんっ！」と甲高い声で喘いだリーゼロッテの唇からは……つううっと涎が垂れ落ちている。

いまいち焦点が合っていない視線がウィルを見下ろし、腰がゆらゆらと揺れる。さっきから擦りあわされている性器同士の音が、心なしか大きくなっているような。

「ひっ、んあ……ふ……。はぁう、んっ、く……もうだめぇ、んっ、ああぁぁ……」

今度はリーゼロッテから動いた。

「はぅ、んん……っ！　はぁ、は……ウィルさまぁ……！　わたくしを、はしたないと思わないでください……ませ、っふ、んんん……っ」

押しつけられたペニスの胴に、そっと指先が寄り添った。

（あっ、く……！　さきっぽが、ぬめりの中に……入っていく……！）

膣口だろうか、亀頭がぬるっとした狭まりに締めつけられた。かと思うと、すぐにその狭まりが亀頭全体を押し包んでくる……。

すでに軌道を定めたペニスから手を放し、その代わりにウィルの胸に手をつくと、リー

ゼロッテは息を荒らげながら前かがみで少し腰を浮かせた体勢に。
「はぁはぁ、ふはぁ、はんっ、く……うぅ」
オオカミの遠吠えのように背を反らし、そこでぷるるっと震えて止まってしまう。
「だ、大丈夫……？」
思わず聞いてしまったのは、柔らかな圧迫に歓喜の声を上げるペニスの先端に、行き止まりを感じたから。処女の証が亀頭に押しのけられつつある。
「だ、大丈夫ですわ……わたくしは、とても嬉しいのです……むしろ嬉しすぎて、感じすぎて……あんっ！　はぁ、はぁ、あ……っく、あんん～っ！」
ぷちっ、ぷちちっ！　と、時間にすればほんの一瞬。
彼女がわずかに腰を下ろしただけで、亀頭は処女膜の領域を突破していた。
（うおおお……！　い、いきなりっ……すご、中で……締めつけられるうっ……！）
ずるるっ、と進入していくペニス全体が、中に入った先からぬるついた柔肉に包み込まれていく。ねとついた肉にしごかれているような、ネトネトの舌に舐められているような……。未経験の感触に男性器が呑み込まれていく。
「はうぅ……っはあ、はぁ……！　ウィル様が入ってきます……っうん！」
ぎゅうぎゅうに締めつけながらも、グチグチと音が鳴るほど中は濡れている。すぐにでも達してしまいそうな柔らかさが蠢いて、ペニスにみっちりとまとわりついてきた。

リーゼロッテがふるっとわななき、最奥まで男根を呑み込むと同時に倒れ込んできた。顔を触れそうなほどに近づけて、じっと潤んだ瞳を向けてくる。
「ウィルさまぁ……んっ、ふ。っは、あむ……」
たまらなくなって唇を擦りあわせ、少し乱暴にキスしながらぎゅっと抱き締める。
「す、ごい……。リーゼロッテの中、気持ちよすぎて、もう動けない……！」
キスの合間にそう囁くと、ひくひくっと震えた膣内の締めつけがますます強く。
「わたくしが……あんっ！　して差し上げますから……っはぁ、はぁ……う！　ウ、ウィル様はそのままで……」
リーゼロッテがゆっくり身体を起こしていく。それに合わせて腰も浮き、さっきとは逆方向に男根が逆撫でされていく。
「うっ！　なんだこれ、きもちよすぎ……ううぅっ！」
幾重にも連なるような細やかな肉ヒダに掻き擦られ、イチモツが歓喜の悲鳴を上げる。
自分は確かに彼女の中に入っていた。いまはそれが引き抜かれつつあり、みっちりと広がった膣口がそれに追従しようとしている感触までもが伝わってくる。
（抜ける瞬間までぎゅうぎゅうに圧迫されて……まとわりついて……）
この上なく心地よく、同時に、射精をこらえるので精いっぱいだ。
もう少し彼女の中に入っていたいし、早く欲望を解放したくもある――。純潔を失った

痛みに耐える彼女に無理をさせたくはないし、もう少しだけ甘えてもいたい――。そんな葛藤の中、少しでもリーゼロッテの手助けになればと手を伸ばし、その腰を支えてやる。
「リーゼロッテ、ゆっくりでいいから……」
すると彼女は少しだけつらそうな微笑みを向けて、その手に体重をかけながら、くねくね、ぐちぐち、腰を上下左右に動かし始めた。
はだけた乳房が小刻みにぷるぷると跳ねていて、誘われるように再び手をかぶせる。
「はぅ……。お願いします、そのまま……っん！　はぁ、ひゃうぅんんっ！」
迫り出された乳房を、きゅっと手に押し包んで激しく揉み込む。柔肉をかき集めるように揉んでは乳首を引っ掻き、乱暴なくらいの愛撫でせめてもの快楽を送り込んでやる。
「あぁ……わたくし、ウィル様のものを受け入れながら、胸を愛していただいてます……。こんなにはしたない格好で……、んっ！　はぁぁ、くふ……！」
まるで自虐のような言葉を呟きながらも、腰の動きはもう止めようとしない。
ぐちゅっ！　ぷちゅ……！　ずち、ぬぷぷぷ……っ！
緩やかだった水音がだんだん強く激しく、やがて室内に大きく掻き鳴らされる。
「ひふぅ……はぁ、はぁ……！　あんんっ！　ふぁ……！」
荒々しく乱れた吐息は短く速く、王女様の表情もうっとりして。
（くううっ！　もう……出そうだ！　俺も……っ）

わずかな理性が限界を超えてしまう。もう我慢していてもしょうがない。
「リーゼロッテ……。すごく締まって……くうっ！　すごく気持ちいいよ……。もうすぐ……ううっ！　だから……！」
囁くように言いながら腰を大きく突き上げる。
ぐちゅんっ！　ずちちちっ！
「ふぁああっ！　ウィル様っ、んあっ、んん！　はぁ、くぅ……！　ひあっ！　わたくしっ！　ああぁ……もう、だめぇ……！」
顎を反らしてひときわ高く叫んだ姫様が後方へ倒れそうなほど背を反らした。
それを支えてやりながら、ラストに向けてあえて突き込みを浅く。
（ううっ！　で……出るっ！）
どくんと脈動を感じた瞬間。精の迸りと同じ速度で腰を押し上げた。
ずるずるになった膣内の肉を掻き分けるペニスが、最後の瞬間に向けて胴震い。最奥に到達した瞬間、ただでさえ狭く圧迫してくる膣粘膜が攻め寄せてきた。
ざわりと総毛立つ、どこまでも心地よい感覚……。ウィルの手が彼女の腰を引き寄せる動作に同期し、リーゼロッテの嬌声が響く。
どくどくどくどくっ！　びゅるっ！　びゅるるるるっ！
「ひんんんっ……！　ウ、ウィル様が中に、っあ！　ふあぁぁぁぁぁ……！」

大きく叫んでガクンと背を反らし、反動で前のめりに倒れてきて、
「あっ、ああ……！　とてもたくさん……まだ、わたくしの中で……」
どくんどくんと脈打つ感覚を下腹に感じているのか、うっとりと目蓋を閉じていく。
ぎゅっと抱き締め、抱き締められながら。
二人はそのまましばらくの時間をかけて息を整え……。
（リーゼロッテのおっぱいが……ぴったりくっついてる……）
ふと気づいたのはそんな感触だった。自分でも気づかぬうちに寝衣の胸元を掻き開いていたらしい。そこにペトッと乳房が密着し、ふにふに転がっている。
生の乳房が自分の胸板でひしゃげる密着感に意識がいった途端、ムクムクと盛り上がっていく自分の下半身。節操がないことに、やはり一度では足りなかったようだ……。
（ふにゅって潰れてて……柔らかい……そしてあったかい……）
休んでいたリーゼロッテがそれに気づき、嬉しそうに目を細めて微笑みながら、
「ウィル様が満足するまで、何度でもお付き合いいたしますわ……」
と甲斐甲斐しい言葉をかけてくれたのは、その十数秒後のことだった。

※

「立派になりましたわね。少しはウィル様にふさわしい宿になりました」
リーゼロッテが見回した宿屋一階には、以前に比べていろいろな調度品が増えていた。

穴というか窪みというべきか、その中はさすがに暗くてよく見えない。というか、入り口とおぼしき場所は複雑に小さなヒダが折り重なるような構造で、こうして見ただけではよく分からなかった。中もすぐ先で窄まっているような気がする。
（そういえば中はかなり狭かったし……）
いまだ一夜だけの経験に照らしあわせてみるも、やはりよく分からず。
（もっと触ってもいいよな……？　これじゃ分からないし……）
どちらかと言えばそっちが本音だった。伸ばした指先で窪みあたりを撫で上げてみる。
くち……っ。ちゅ、く……。
「あぅ、んっ！　な、に……？　触られただけで……っ、んん！」
途端に震えた声が上がり、レオノラの身体も小さく震えていた。
「ごめん！　でも見ただけじゃよく分からなくて！」
「そ、それにしたって……いきなりさわるな……んっ！」
叱責する言葉のわりに全然迫力がなく、それどころか甘えるような響きがある。
試してみたくなって、もう一度、今度は少し強く押してみた。
にゅぷ、ちゅぷっ……！
「あ……。濡れて……る」
少し指先を埋めるようにして押し当てた途端、とろりとしたものが指に絡みついてきた。

それが感じている証だということくらいはウィルにも分かる。
それをにゅるにゅると塗り広げるようにして、周囲を何度も何度もなぞってみた。
「ひっ、あ……！　そ、そんなにっ、んんんっ！　はぁ、くっ……うぅ」
しばらく続けると、明らかに声質が変わってきていた。
戸惑うような声に混じって、鼻にかかった甘い声や、短い悲鳴のような声も混じってきている。しかも、膣口の付近をヒクヒクさせていて――指先が秘裂の上端をかすめた途端、ビクンと腰全体が浮き上がった。
「ひっ！　そこ、うううっ、やっ、だめぇええ……っ！」
抑揚のきつい喘ぎが迸った瞬間、ぷちゅっ！　とひと筋のしぶきが飛んだ。
「えっ？　うわわっ！」
続いて、二回目、三回目と潮吹きが連続。かなり勢いのある水流は手に当たって弾け、ウィルの顔にまでぴちゃぴちゃと水滴を飛ばしてくる。
「はぅ、んんっ……！　バカ……、さわるなって、言ったのに……っ！」
秘裂の上端の小さな膨らみは、特に感じてしまうらしい。八つ当たりというか、ますます甘えるような声になって、レオノラが文句を言ってくる。
（おしっこ……じゃなさそうだ。声だって、初めて聞いた可愛い声だったし……）
彼女の熱に当てられてしまったようにぼーっとしていると、膣口がピクピク動いて少し

広がったからか、その奥まった部分を囲むような小さなヒダがあることに気づいた。
（たぶん、これが処女膜だ……。女の子の純潔の証なんだ……）
頭の奥がじんっと熱くなってくる。それ以上に、前かがみの股間もズキズキと熱を発し始めている。なにもしなくても漏らしそうなほど勃起して、牡の欲求を激しく訴えてくる。
「レオノラ……あの……」
顔を上げると、彼女は相変わらず顔をそらしたままだった。
だが、短めの髪がかかるその頬は髪の色と同じに赤くなり、わずかに開いた唇からは、つうっとひと筋の唾液がこぼれているのが見える。
ちらりとこちらを見た彼女は、見られているのを知って慌てて再び顔をそらす。しかし、その瞳がうっとりと潤んでいるのを見てしまって、ますます抑えがきかなくなった。
彼女とは長い付き合いだし、どうせごまかしなんてきかないだろう。
「レオノラの中に入りたい」
自分でもびっくりするぐらい素直に、ストレートな言葉を言うことができた。
「バッ！　バカ！　そんなことしろなんて、言ってない……！」
「まあ、言われてはいないんだけど……もう我慢できないというか」
覆い被さるようにして股間をくっつける。ズボンを穿いたままだが、その硬さは充分に伝わっているはずだ。

「……っ！」
こちらを向いた顔が、目をまん丸にしてますます真っ赤に茹で上がってしまった。
「ウィルは……そ、そんなことするヤツじゃない！　そんな……エッチな、ことは……」
やはりレイプされた記憶の方が正しかったとでも言うつもりだろうか。
しかしそんなことを言われても、ウィルはすでに確信があった。レオノラにかけられた呪いはもう消えている。
あそこをいじられて甘えた声を出したのも、潮を吹いてしまったのも、さっきからの反応はすべてレオノラ本来の反応だ。
（こんな顔するなんて……可愛いなあ。なんだか楽しくなってきたぞ……！）
だから下半身に切迫感を感じながらも、このじゃれあうようなやりとりが楽しかった。
「レオノラが可愛いから、したくなっちゃったんだってば」
「そそ、そんなこと……言うな、バカ……」
と言いながら、レオノラはモジモジと腰を揺らめかせている。
腰と腰がますます密着して、擦れあって、まるでウィルを求めるような動きだ。
とどめとばかりにとっておきの言葉を投げかけてみる。
「さっき、俺のこと好きだって言ってくれたよね？」
「そっ！　そんなこと言ってない！」

すかさず否定が入ったが、その反応からして心の中の想いを認めているようなものだ。
「あー、それが言っちゃったんだよねー。ちょっとぼんやりしてたみたいだけど」
「っ……」
少しは自覚があったのか、ちょっと悔しそうな顔。これも魅力的な表情だ。
「……す、好き……だよ。なにか文句でも⁉」
さすがレオノラ、あっさり認めた。少しだけ往生際が悪い逆ギレがあったものの、それくらいは愛嬌だ。
「いや、ないよ。むしろ嬉しいよ。もっと早く言ってくれてもよかったのに」
「そ、そんなこと、言えるわけない。あたしより弱かったくせに……いつもあたしの後ろにいたくせに……」
「んー、そうだったね。だから俺はレオノラに憧れてたんだけど……」
「それがいつの間にか冒険者になって！　それどころか勇者になって……！　どんどん偉くなって強くなって……あたしは、どう接したらいいか分からないのに……」
そうだったのか。偉くなったり強くなったりといった自覚は少しもないのだけど、レオノラに言われるとすごく誇らしい気分になる。
「レオノラってこんなに可愛かったんだ。ごめん、もう……」
言いながらズボンを下ろしてイチモツを取り出す。太腿に触れたペニスの熱気と、その

言葉に耳まで真っ赤になって、彼女は口をぱくぱくさせている。
「だからっ、可愛いとか言うな……バカ……」
ようやくそれだけを言い捨てると、くたっと全身の力を抜いてしまった。股間が離れた代わりに、足が開かれ間に迎え入れられる。すべてを受け入れるという意思表示だ。
胸元に手を伸ばしても、もちろん拒絶はない。ジャケットをずらして肩をはだけさせ、邪魔なインナーも引きずり下ろして、美しい鎖骨のラインから乳房までをあらわに。
秘められたすべすべの肌が露出し、綺麗なお椀型に盛り上がった山が現れた。
「レオノラのおっぱい……着やせするのかな？　想像より大きくてぷりぷりしてる……」
「そんなこと想像してたのか。ウィルは……」
呆れたように呟きながらも、やはり恥ずかしいのか、身体を揺らして視線から逃れようとしているように見える。
「そりゃまあ、男だし。憧れてたからみんな妄想してたと思うよ……。でも、予想以上に綺麗なおっぱいだった。それに……なんだかいやらしい」
「やっ、やめろって言ってるだろ……！　そういうこと言うなぁ……」
鍛えているから身体中どこもスリムな印象なのに……。肩だって頼りなく感じるくらい細いのに、その引き締まった中にこんなに柔らかそうな膨らみができている。
たまらず乳首に吸いついた。もう片方には覆い被せるように手を当てると、ちゅちゅっ、

ぐにぐに……。張りと柔らかさに満ちたそれぞれを、口と手のひらでもてあそんでみる。
「ふあっ……。んっ、んんん……っう、はぁう……」
するとレオノラの口からはうっとりとした吐息が漏れ始め……。
ちゅぱっ、ちゅ……くにゅくにゅ……。ちゅぱっ！
（あ……レオノラのあそこ、すごいことに……）
ちゅぽんと、音を立てて口を離した拍子に目に入った惨状に驚いてしまった。
潮を吹いて、ただでさえ濡れそぼっていたレオノラの秘園は、新たな愛液の滴りをトロリトロリと溢れ出させてぐちょぐちょになっている。
「レオノラ、このまま……入れるよ」
「……ん」
小さく頷いたのを見て、もう張り詰めて痛いくらいのペニスに手をやる。
小作りで挿入箇所に迷いそうな秘所だったが、いまもトプトプと愛液が垂れ流れているおかげでどこに入れるべきかすぐに分かった。
そこに亀頭をあてがい、少しずつ、少しずつ……押し込んでいく。
「……んっ！　っあ……！」
ぴくんと全身で反応して、わずかに喘ぐレオノラ。
さっき確認した処女膜をペニスの先っぽに感じる。それがペニスの進入によってじわり

じわりと押し込まれていき……ある一点で、一気に弾けた。
「あぅ……！　ウィ、ウィルっ……！　っは、あああぁっ！」
「ううっ……！　吸い込まれる……！」
処女の証があった場所を通過したと思った瞬間、ぬるりと吸い込まれるような感触。亀頭から肉茎にかけてが、次々に温かい締めつけに包み込まれていく。
「ひぁ……っく、んんっ！　くふっ、ウ、ウィルが中に……はぁあぁぁ……」
最初は悲鳴じみた喘ぎを上げたものの、すぐに息づかいは穏やかに。最後にほうっと吐息をついて呟いた少女に、ウィルの腰がぴったりと密着した。
膣内の奥から入り口にかけて、柔らかいものにざわりと撫でられたような感覚が走って……次の瞬間にはぎゅうっと強烈に締めつけてきた。
「くぅあ……。し、締まる……！　レオノラっ！」
たまらず腰を押し出してしまう。少女の腰が浮き、背が反って、最奥まで到達していたはずのペニスがさらに一段進み、奥をコツッと突き擦る。
「当たっ、ひあぁっ！　あ、んんっ……！　はぁぁ、あぁ……ウィルぅ……！」
叫んで大きく身体を跳ねさせ、足を絡ませてきたレオノラの腰を支えてやる。尻を持ち上げるような格好になると、スカート部分が大きくまくれて接合部があらわになった。
横にどけられたショーツはぐちょぐちょになって貼りついている。あの小さな膣口は、

大きく丸く卑猥に広がって、ペニスの根元をきゅっと食い締めていた。
「レオノラとつながってるよ……！　くっ、すごくあったかくて、キツい……」
「中でウィルが……動いてる……。ふふっ……」
柔肉の洞窟にすべてを包み込まれて呻くウィルよりも、処女喪失をものともせず微笑んでいるレオノラの方が、むしろ余裕があるように見えた。
目を下ろせば、ペニスの周りにまとわりついた愛液には赤い色が混じっている。
（ううぅ、格好悪い……。一応、こっちは経験者なのに……）
ウィルが腰を引こうとしても、ずるずると肉の吸盤に引っ張られる感覚に責め立てられ、情けないことに切迫した息が漏れてしまう。
しかしレオノラはそれが嬉しいようで、いつもの控えめな笑みを浮かべながら見つめてきた。それこそ以前のように、弟分に向けるような微笑みで。
「いいよ……。好きなようにして」
「……そうしたいけど、キツくて動くだけでもひと苦労なんだよね……動いたらすぐ出ちゃいそうだし。レオノラだって、初めてじゃ痛いだろ……？」
もっとレオノラの中にいたいという言葉と、初めてのレオノラを気遣う言葉とは矛盾している。だが、そのどちらも本心だった。
「ん、そっか。ウィルもまだまだな……。ふふっ……」

「むっ……なんだよそれ」
一応は気遣ったつもりなのに軽く返されてちょっと悔しい。
だが、あくまで弟扱いしたいというならこっちにも考えがある。たとえすぐ果ててしまおうとも、抜かず三発じゃ済ませない。レオノラが気持ちよすぎて泣いちゃうまで、ノンストップの覚悟でやってやる。
がばっと覆い被さると、再び乳首を口に含む。さっきより心なしか大きさを増した乳頭が、突き出した舌にぷにぷにと心地よい。
それを感じながら、途中まで引いたペニスをぐりっと斜めに突き上げた。
「あっ！　ん……！　やる気……？」
「もちろん！」
意気揚々と応えてもう一度奥まで突き上げた。うまいこと乗せられている気がするが、それはもうどうでもいい。
ぐりっぐりっと亀頭を奥に擦りつけ、すかさず引いて……ぬるぬるした蠢きに、一瞬で背筋が痺れた。心地よい感覚がペニスから腰を通って全身に走り抜けてしまう。
「うおおおっ……これは……！　でも、まだまだっ！」
ずちちっ！　ぷちゅ、ずずず……っ！
背を反らしたレオノラにしがみつくような格好で、乳房へとでたらめに舌を這わせ、べ

ちゃべちゃにしながら。技巧が足りない分、それをカバーするような激しさで膣内を掻き回す。ぷじゅっと音を跳ねさせて愛液が飛んだ。

膣肉の小さなでこぼこが締まってきたり、それがうねるように撫で上げてきたり。こちらが気持ちよくて腰を震わせるのと同じように、レオノラの身体もぴくぴくと跳ねる。

「あっ……く、っあんっ！　んぅ、はぁ……っ！」

途端に彼女は息を詰め、そして耐えられず喘ぎと吐息を走らせる。

あっさり声を出してしまったのが癪なのか、少し眉を寄せた顔。でも、瞳を潤ませた視線は戸惑いがちにもゆらゆら揺れて、さらなる行為を求めていた。

（レオノラ……！　そうだ、俺は昔から憧れてたあのレオノラと……しちゃってるんだ）

その喜びを抑えられない。きっとそれはレオノラも同じだ。

そう思い至ると、手加減なんかする気は完全に失せた。お互いがお互いを求めているのに、そんなことする必要はない。

ちゅく、ずずっ！　ぐちゅっ、ぬぬぬっ、ぷぷっ！

出し入れするたびに鳴り響くいやらしい音も、行為が実感できて心地いいくらい。

射精の予感が高まってきて、柔肉に埋まったペニスがビクンと跳ね回る。

「中で……ウィルのを、中にっ……はぁ。んんっ、くふ、ひ……あっ！」

勘のいいレオノラはそれを察して、抽送のさなかにも足を動かしてきた。

マージと話していてすっかり忘れていたが、その間もアニスは自分に向かってずっとなにか呟いていたらしい。
「いや、無視してたっていうか……それどころじゃないの、分かるよね？」
せめてアニスが正気に戻ってくれればこの場もなんとかなりそうなのだが、
「分からないわよ……。どうせ私、がさつだもん。昔からもっと王女らしくしろって、みんなに言われて……私だって……うぅ……ごめんね、ウィル……」
まるで酔っ払っているみたい。正気に戻るのは全然期待できないようだ。
「アニスちゃん、よっぽど溜まってたのねぇ……。幻惑呪詛が変な方に効いちゃってるみたい。溜め込んでた思いが表に出ちゃってるのよー」
とはマージの解説。
（そうかそうか、やっぱりアニスだって根は素直でいい子なんだよな……。なんて言ってる場合じゃないんだけど……！　おいおい、収まれ我がムスコ……！）
ウィルは椅子に座らされている。その太腿のあたりにさっきからぷにぷにしたものを感じるのは、アニスが腰に抱きついてきているからだ。
「あらウィル君、まさか……」
「ううう……言わないでください」
むくっと起き上がり始めた分身が恨めしい。

状況はウィルにとって絶望的。相手がマージだけにそれっぽい雰囲気こそないものの、極めて深刻な生命の危機だというのに。この下半身ときたら……。
「んふふー、恥ずかしがることないじゃない。それでこそ男の子ってものよねー」
するするっとすり寄ってきたマージがウィルの膝に座る。
「じゃあ私がこんなことしたら、アニスちゃんはどうするのかしらねぇ」
などと言いながら顔を近づけてきた。行動を予測できずに、ウィルは目を白黒させる。
「んんんー！　マージふぁ、んむ……ふ」
「あん、喋っちゃだめよぉ……。ちゅ、んく、ちゅぶ……！　はぁ、んむ……ぅ」
両手で頬を捕らえられて、むちゅーっと唇が密着した。ほんの少し開いた隙間からぬるりと舌が入り込んできて、口の中をちろっちろっと舐めくすぐられてしまう。
「うわぁ、む……ぷはっ！　はぁ、はぁ……」
ぞくぞくとした感覚が走り抜けて息が止まりそうになった。慌てて顔を引いたものの、一瞬で引き戻されてしまって……。
「勇者様とキスしちゃうなんて、私もぞくぞくしちゃう……。んっ、あん。ほら、もっと舌を出して……こんなふうに……」
口腔に侵入してきた舌先が引っ込めたこちらの舌をくすぐり、操られたように持ち上がってしまう。それを搦め捕るように動かし、マージの舌が表面を擦りあわせてきた。

ちゅく、ちゅっ……くちゅ、ぷ……にちっ。
ゾクリとするくすぐったさに、半開きの口から舌が突き出されてしまう。その先端に吸いついたマージがちゅるるっと舌フェラをした途端。
（気持ちいい……！　舌でくすぐられるだけでこんなに……！）
頭の中は陶然として、下腹部はどくんと脈動。充血を完了したペニスがズボンを持ち上げ、ジンジンする痺れを発し始めていた。
「うあっ！　な、なんだ……？」
その屹立がぎゅっと握られている。
いきなりの感覚に驚いて目を落とすと、犯人はアニスだった。
「えっ⁉　なんで、ちょっと……っあ！」
「うるさい……！　ウィルのくせに……ぃ！　マージさんにキスされて、なんでそんなに気持ちよさそうにしてるのよ……！」
「ええっ⁉　うわ、やめてやめて！　ズボン脱がさないで！」
さっきまでは虚ろな目つきだったアニスが、今度はふくれっ面で睨んでくる。しかもズボンに手をかけてズリズリと引っ張って。
マージがそっと離れてふむふむと納得顔。
「ふぅん。嫉妬かしら？　それとも執着かしら？　どっちにしてもアニスちゃんは複雑ね

ぇ……魔法にかかってもこういうツンツンした性格なんて……」
「なにがですかっ⁉　それよりちょっとマージさん、にやついてないで助けて！　あああっ、なんでこんなことにぃ！」
　自分の命を狙う悪魔に助けを求めつつ、なんとも情けないことにズボンを引っ張られてろくな抵抗ができない勇者様。魔法のせいか知らないが、いまは赤ちゃんくらいの力しか出ないのだからしょうがない。
「あああっ！　見ないでぇ！」
　などと少女めいた悲鳴を上げた瞬間、ウィルのズボンはずるっと脱がされてしまった。もちろん、それと同時にペニスが天井に向かってそびえ立つ。
「はいはい。ウィル君は大人しくしてましょーねー」
　マージが抱きついてきて身体の自由を奪う。椅子に大人しく座らされたまま、下半身はビンビンに立たせているという状況がなんとも切なく情けない。
「ふふん、なによ。こんなにしちゃって……！　どうせリーゼロッテともレオノラさんとも、こんなことしたんでしょ……⁉」
「えええっ⁉　な、なぜ……それを」
「ほら！　やっぱりしたのよ！　手当たり次第、女の子に手を出して……！」
　カマをかけられたらしい。

仲のいいウィルたちを見てなんとなく勘づいていたのだろうか。潔癖そうなアニスのことだから、心の奥ではそれを軽蔑していたのかもしれない。その潜在的な思いがマージの幻惑魔法によって表に出てきたのかも。

（でも、それにしたってこれはいくらなんでも……！　うあっ！　握ってるぅ！）

ぎゅむっと肉幹を握られて、かすかな痛みとそれ以上の心地よさが走り抜ける。

「んふふ、ウィル君もだけど、アニスちゃんも面白いわねー。私、なんだか気に入っちゃったわー。悪魔心をくすぐる可愛さなんだものー」

なんてことを囁きつつ耳をペロリと舐めてくるマージも手に負えない。ムスコを人質に取られ、耳たぶに舌が這う感覚にもゾクゾクさせられて、情けないことにびくっと身体をすくませてしまう。

「ふーん……これが男の人の……ウィルのおちんちん……」

アニスは、椅子に座ったウィルのちょうど正面に陣取り、床に座り込んでいる。その目つきがまた怪しくなってきた。

ぶつぶつとなにかを呟きながら握る力を少し弱め、ペニスを探るように撫で始める。

「いいわよ……。私だってウィルに迷惑かけてるのは自覚してるもの。お礼しなきゃって、いつも思ってるんだから……」

それがまるでペニスに話しかけられているみたいで、とにかく恥ずかしい。

「ねえアニス、正気に戻れとまでは言わないから、少しだけ落ち着いてくれると嬉しいんだけど……。うっ！　そ、そんなふうに撫でられてると……あの……っ！」
ウィルの声は耳に届いていないようで、指先で亀頭がこねられていた。片手で竿を支え、もう一方の指先がくるくると亀頭の上を躍る。
ぷちゅっと湧き出てきた先汁は、ウィルがそれを心地よく思っている証だった。
それにしたってアニス、こっちの言うことはまるで聞いていない。
「ううっ……！　い、いじっちゃだめ……だって！」
「あはは……なにこれ、へんなの」
独り言みたいに呟きながら肉棒をつまみ、剥き下ろされた皮を引っ張って遊んでいる。
チクチクと痛みが走り、そして気持ちよくもある。いまの自分はマージに抱きつかれただけで椅子から立てないくらい非力なくせに、感覚はさっぱり鈍っていなかった。
「はぁ、はぁ、う……っ！　アニス、あんまり強くすると、くっ……あ」
抵抗どころか身動きすらできずにひたすらペニスをいじられ続けるという、マゾっぽさを感じるこの状況。自分でも意識しないうちに息が乱れ、腰が勝手にぴくっと跳ねる。
（あああ、だめなのに気持ちいい……！　アニスが、あのアニスが俺のモノを……！）
ぞくりぞくりと腰の奥に疼くものが生まれた。眼下で一心不乱にペニスをもてあそぶアニスを見ているだけで、胸の奥もムズムズし始めて……ペニスの脈動が強くなる。

（手がすべすべしてて、掴まれただけで……！　ううっ、指が裏筋に当たってる……！）
ペニスをこんなふうに乱暴に扱われて恥ずかしいとか、こんなことしてる場合じゃないとか、もろもろのことがいまはどうでもよくなってくる。
「うくっ！　はぁはぁ……、アニ、スッ……」
相手の名をつい呼びながら、腰をぐいっと持ち上げてしまった。
「なによぉ？　まさか私に舐めろって言うの……？」
そこまでは言ってないし思ってもいなかったが、魔法で変になっているお姫様は元からこっちの言うことは聞いていない。
「そこまでしてほしいなら……して、あげないこともないわよ。でも、仕方なくだから……こんなこと、本当はしたくないん……だか、ら……んぷ……ちゅ」
「うあああっ……！　アニス⁉　ほ、ほんとに……舐めてる……⁉」
ちゅっと唇の柔らかさが触れた次の瞬間には、ぬるりとしたものが亀頭に触れていた。
（舐めてる……⁉　アニスが俺のを⁉　うあ……きもちっ、よすぎ……！）
フェラとしてはつたない動作で、ただ唇を触れさせて少し出した舌で舐めているだけ。
なのに、ペニスに初めて感じる女性の舌の感触は、ウィルがなんとなく想像していた以上に淫靡。そしてねっとりと気持ちいい。
少女の唇が亀頭のてっぺんにくっつく。それだけでも感無量なのに、半開きの隙間から

柔らかいぬめりが伸び出てきて、鈴口のあたりに舌先でぺとっと貼りついてくる。
ちろっちろっと、試すような舌の動き。そこに唾液が乗ってすぐに水音が響き始めた。
「くうっ！　あっ、だめだって、ほんとに！　こ、これじゃ……」
ぴちゃりぴちゃりと鳴るたびに、快感が鈍い痺れとなってペニスを走る。いけないと思って力を込めたせいでペニスがビクンと跳ねて、アニスの唇をまくり上げた。
（やばい！　出そう……！）
いつの間にかそこまで追い詰められていた。
こんなにあっさり出すのも、アニスの目の前で出すのも、男として恥ずかしいことだ。そう思って必死に力を込めてこらえるものの、とてもじゃないが押しとどめられない。
ちゅぱ、ちろっ……ちゅ、ちゅ……。
両手に包むようにペニスを支え、亀頭にキスを繰り返すアニス。舌の感覚もどんどん鋭敏になり、まとわりつく唾液と先走りのせいでにちゃにちゃした密着感が増していく。
「出したいなら出しちゃえばいいじゃないのー」
じゃれついてくるマージが背中に二つの膨らみを押しつけた。とてつもない重量感が背中に広がるのを感じ、なおさらペニスがひくついてしまう。
「もう……く！　やばっ……！　出るっ、あああっ！」
手の中の脈動に変化を感じた上目遣いのアニスと、目が合った瞬間だった。

「あ！　なにこれ……！　んっ、んぷぷっ！」
どぴゅっ！　ぴゅ、どくどくっ！　どぷぷぷっ！
唇に覆われていた先端部分から、すさまじい勢いで白濁が噴き出していた。
「ひゃう！　……んんっ！　これって……んんっう」
口中に飛び込んできた液体にびっくりしてアニスが顔を引いた。その顔を縦断するように、唇から額にかけて精液がビタビタと滴り落ちる。
王女様はそれでもペニスを放さなかった。むしろぎゅっと握りしめられて、残った精の迸りがぴゅぴゅっと断続的に搾り出される。
「あぁ……んっ、はふ……。これがウィルの、せいえき……」
喘ぐようにふわふわした声で呟き、アニスが嬉しそうに目を細めた。
降りかかる白い雨に顔を汚されるがままに、再び虚ろな、それでいて頬をぽうっと上気させた表情に。悶えるように身体をもじもじさせながら、小鼻をかすかにひくつかせ、その表情は精の香りにうっとりしているようにしか見えない。
そしてもう一人の女性も、ウィルの射精を目にして緩やかな吐息を漏らしていた。
「ああ……ウィル君の、すてき……。とってもいい匂いだわ……」
少なくともウィル自身はそうは思えないが、その青臭さが漂うとマージは我慢できないとばかりに手を伸ばしていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

二次元ドリームマガジン

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

コミックアンリアル

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

コミックプリズム

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

メガミクライシス

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて! キルタイム 検索 Click

書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

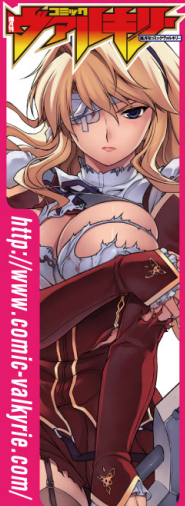
各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！